

---

# **女忍者～呪われしき宝石頂戴グループ～**

如月水木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女忍者～呪われしき宝石頂戴グループ～

### 【NZコード】

N4026D

### 【作者名】

如月水木

### 【あらすじ】

美白端正お嬢飛鳥 アスカ が、どこまでもマイペース人瞳ヒトミ、スタイル抜群リーダー楓 カエデ、男前すぎる海実 ワミ、和やかな空気の持ち主沙理 サリ と一緒に女忍者になる？！任務は上手いくのか？そして飛鳥はどんな風に変わっていくのか？

## プロローグ（前書き）

もちろんフィクションです^ ^  
大長編になる予定ですが  
気長につきあってください(　・、・、・)

## プロローグ

「飛鳥つ！飛鳥つ！」

肩から溢れ出す血。それは今までに見た事無い鮮色で。

痛い？

全然。痛いという感情よりも先に痺れが襲う。

「うう。。。」

でも、終れない。

止まれない。

「待てや、おいつ！」

楓のアルト声が遠くに聞こえる。

敵、捕まえるから、お前はそこで生きる。  
聞こえない言葉。伝わってくる言葉。

「飛鳥つ！んな所で終るのか？」

私は、まだ、おわれない。

ワタシシハマダオフレナイノー

でも、でも 頭が、意識が飛んでいく。

「飛鳥さん、飛鳥さん、まだ、お願ひです！寝ないでくださいっ！」

薄つすらと重い瞼の下から見える光景。

目の前にいるのは、沙理？

もの凄いスピードで駆け寄り、長いスカートのスリットの部分から  
救急セットを取り出し私の肩に触れる。

「お願ひです。飛鳥。まだ、寝ないでくださいー！」

叫びともいえる声。嗚呼、駄目…眠い。

「飛鳥さんっ！私、あの、失いたくないんですっ！失いたくないんですっ！」

小さめな目に溜まつた涙は、私の額に落ちた。

「飛鳥さ、んっ！」

分かつてゐる…まだ、私やらなくちゃいけないのにね…。でも…この眠気には…。

『バチン！』

軽く鈍い音。全く痛さは感じないが、どうやら頬を打たみたいだ。ん？ そういえば……私初めて人に頬を打たれたな…。

「あ、飛鳥さんっ。飛鳥さ、ん。」

「お 起きてるわよ、うつさいわねえ。」

どうやら肩に刺さっていた矢を抜いたらしい。急に意識が遠くなつた。

## 宝魚島お嬢様

初夏。宝魚島 ホウギヨトウ では、大騒ぎが始まる一歩手前だつた。

「飛鳥 アスカ 嬢、『じ気分はいかがなさいますか?』

「…………普通。」

「お腹の方は空こしていらっしゃいますか?」

「別に。」

「他に何か申し付ける事は『いれこませ・・・』

「あああー!ついでに!無にからひ。」

「しかし……」

「私が無いって言つたらないの?ー!」

「わよひですか。なれば、失礼をして頂きます。」

「…………早く行け。」

色とりどりのダイヤモンドや光り輝く金の粒が散らばつてこる椅子の上。

私は独り、無性に湧き上がる苛々をそのままに踏ん反り返つていた。

……つむぐそこ。自分の事位は簡単に出来る。

なのになぜこんなに周りの者はうるさこのだらつか。  
なぜ こんなにも周りに干渉したがるのだろうか。

急にまぬけずあらぬ音が、天窓から響いた。

おかしい……。外から物音がするなんて。

完璧とまで言われた防犯設備が故障でもしたのだろうか？  
顔をしかめる。最近の癖となっていた。そのせいで額に少し、皺の  
痕が残っている。

…………少しくらいこなりここかな？

ほひ、だつてさ、故障したら家来とかに言わなきゃなんないしつ。

今まで感じた事の無い感情。

自分自身に色々と言い訳をつけときながら、好奇心と嘲り気分のやつ  
かいな感情を露にすること。

『ジナード』

「こつつか。つたくよお。」

田を見開く。ギョッとして背後を振り向く。

「あ。お邪魔します。俺の畠前は瞳 ハード。ビームセーブル」

「ちよ、ちよっと、待って。話を整理するから。」

「どおぞお」

「まず、お前は……」

「ストオーブ！俺、お前じやないのー瞳つてこいつ前つこてるの  
うんつ」

「……まず、瞳は、ええつひとつ。女忍なんだっけ……？」

「つありえない。」

「うんつってアレ？何でありえないの？』

田の前で「一ノ口」としている少女を、私はまじまじと見つめた。  
身長は平均的な私よりも十センチ弱低いが、なんとなく同じ年だろ  
うという事は分かった。

黒に近い青の服を着ており、それよりも真っ黒な髪の毛が肩よりも  
短い位置で跳ねている。

寝癖なのか天辺の髪一房がピーンと立っているのがどうもな  
く気になる。

日に焼けた健康そうな頬に、よく見ないと分からぬ位の小さなほ  
くろが左に一つ。

緩やかなカーブを描いている輪郭。大きくて黒田勝ちな奥一重の田  
に、影が出来るほど長いまづげ。特徴のない鼻、小さめの顎。

「オレ、そんなに見つめられると照れちゃうなあー

私はふとそこに見つめられたと照れちゃうなあー

……痛みを感じないのだろうか？

今、私の時代。少なくとも日本に生きている人類全てにおいて、『安全』の保障がついている。

小さな子供には小さな傷一つ無いし、大人でさえ皆瘡蓋や傷の無い綺麗な手足をしている。

そんなもんだから、良い年した大人が少しでも傷を作ると大体は泣くかパニック状態におちいる。

なのに……この少女、瞳は……。

うんと高い天井についている天窓から落ち、思い切り体を打ちつけたようだが痛そうな表情は一切見せなかつた。

「あのおー 飛鳥ちゅわあん」

「え？ あ、なによっ。」

話しかけられるのを恐れていたかのように体が反応する。

「話し整理できたあ？」

「えつ。つとそうだつた。まずお前は、」

「ひ・と・みー」

「つ。瞳は女忍。信じてないけど。で、ある宝を探して……。リーダーに危険な旅になるだろうから、一緒に仲間を探そつと……。」

「そうそう。一緒にね。」

「しかし、方向音痴な瞳は……。」

「うわ、失礼だなあ。」

「女忍仲間と逸れてしまつた。つまり、迷子。」

「うわあ～何コレ～。フカフカ～」

「そんで……つて瞳つ！ 勝手に人のベットに乗つてんじゃねえよつ！」

「…………NNNNNNNN」

「しかも寝るなよつー…」

「飛鳥嬢、何か『やじこ』ましたか……？」

背後の扉から声。人間ではない、ロボットの冷たい声。

「何もないっ！」

言つた方が良いだらうか？一瞬そんな思いが胸をよぎる。しかし、考へてる間も無く、咄嗟に応えていた。

「はあ…………。」「

大きな溜息。ドレスなのにも構わず、その場であぐらをかく。

「お前ー！じゃなかつた。瞳ー！起きやつー。」

「ん~。ねじやーら~」

微かに唇が歪む。噴出しそうになるのを堪え、怒鳴る。

「おじやーり~ つじや ねえよつー！」

「はあ……？ん。あ、そつそつー。」

急に真剣な顔になると、瞳は飛鳥の手を捉える。

「飛鳥。おぬしを女忍メンバー、『呪われしき宝石頂戴グループ』に任命する。」「

声色を年取った老人のようになれば、瞳が話す。私はその事に呆氣を取られ、内容は理解できなかつた。

「つて事でよろしゅう、俺まだ眠いんだあ、」

やつと正常に脳が動き出した。…………ん？え？は？

「？ん？私、女忍。メンバー……？任命？呪われた、宝石い？はつ？嘘！」

やつと、やつの事で理解した私は思わず叫ぶ。

「ぎょええええ――――――――――――」

「ん？なあに、起こさないでよお～。」

「嫌。無理。断固拒否。」

「決定した事はあ 变えられないのぉ

「決定許可なんてした覚えねえつ！大体ね！瞳ー！よお～く聞いて。」

「聞いてるつて。」

「私は宝魚島のお嬢。生まれたときからお嬢様になるための教育を受けてきたつ。」

まくしたてる。相手に隙を与えてはならない。少しでも口調を緩めたら簡単に入り込まれる。

「それにねえ、小さい頃から顔だつて可愛い、頭も良い。もう、完璧にお嬢様ねつ。といわれ続け育つてきた。

外の世界に关心を持つことなく、この、この狭い城の中で全てを学んで生きてきた。

瞳、分かつた？私はこの城でこれからも生き続けるの。

そんな冗談もう、付き合つてらんない。早く家に帰つて！

良い加減にしないと、家来よぶかひ。」

どうにか嚙まずに言えた……。もう十分だろつ。このおかしな少女、瞳は帰るはず。

変な冗談はこれで終わり。ただでさえ疲れている体に更に疲労が溜まる。

「家来い？呼べばあ？」

「…何を言つているんだろ？」「

瞳は、自分が発した言葉の意味を分かつて言つているのだろうか？

「家来の百匹や一百匹、どおつて」とないさあ」

異常な頭痛がする。

「だつてさあ 樂勝だもん 自信あるし」「

一ヤリと笑う瞳を見て、私は背筋に寒気がした。

きつと風邪を引いたから…なんて単純な理由ではないだろ？

『異常事態発生。ただちに対応せよ。異常事態……』

耳に鳴り響くブザー。私は自分で無意識に押していった事に気づいた。右手の人差し指が、微かに震えている。

「あちやあ～。本当に呼んだのかよお。ま、いつか。」「

「…………」「

「いくよお～いつせいのあ」

「？」

「せえつ！」「

「飛鳥嬢様つ！」

扉から現れた大量の家来とロボット。

それらをかけ離すように瞳は私を軽々と抱え、頑丈な窓を突き破り、外に飛び出した。

私は、こんな有り得なさすぎる出来事に対応できるような体じゃなかつた。

全体重を瞳に預け、初めて失神を体験する事となつた。

## 独り言（前書き）

今度は瞳の視点から

## 独り言

よしよし。俺の仕事はこれで完了へー 口元を緩めて、息を吐く。  
「飛鳥へ、空飛ぶ位で気絶するなよなあー。」

気絶している為、遠慮なく顔を眺める。

確かに周りに可愛いと言っていた顔ではあるだろう。  
小顔に、ぱっちりな一重。

少し尻が上がり気味な所が、お嬢っぽい雰囲気をかもし出していた。

冷笑が似合いそうな口元。なぜか紅にそまつた鼻。  
「てかこんなに白い肌。ありえねええええー。」

飛鳥の雪みたく白い肌。うう 羨ましいぜつ。

俺なんて、陽に焼けて真っ黒くなっちゃったよ。  
くそつ、飛鳥も絶対色黒女にしてやる

13

それにしてもこいつ…本気でやつていけるんだろうか?  
忍者は相当な体力を催す。弱いものから墮ちてゆく世界。  
たぶん我が儘放題に生きてきただろう体には無茶ではないか  
?

ま、今頃考えても遅いや。

でもなあ…体付きが標準よりは細い。きっと骨が細いんだろう。骨  
が細いと傷を負つた際、折れやすいしあんまり得はない。

「そういやあー楓も骨細いよなあー。」

最近独り言が多い。いかんいかんつ！

確か独り言が多いと、将来円形脱毛症になるという恐ろしき事を聞

いた。んー、でも何故こんな独り言が増えたのか？

「あ、分かった。仲間と逸れちまつたからだな」

うん。きっとそうだろ？

自分の服の胸ポケットを確認する。

やはりそこには仲間共通通信機は無かつた。嗚呼！不覚だ……。まさか落とすとは思わなかつた。

楓と海実にあれ程『胸についているポケットに入れてると落とすから、他の場所にいれる。』

と注意されたのにも拘らず、面倒臭いという理由からそのままにしていた自分への罰だらう。

ふう。つまんねえや。早く飛鳥起きねえかな。

文句ばつか言われつけど独り言よりはましだろ？

笑顔（前書き）

また『飛鳥』の視点に戻ります

## 笑顔

「ぎやあ！」

目が覚めて、真っ先に飛び込んだおかしな少女と、果てしなく広がつている木々の量に驚き、声を上げる。

「人の顔見て、ぎやあ！とは何だよお～」

不気味な笑いを浮かべた少女を見るうち、記憶が段々と戻つてくる。うげ、思い出したくない事まで思い出してきた。

「瞳。俺様は瞳。君は女忍者の飛鳥」

完全に意識と記憶が戻つた。

「私は…女忍者じゃな～いつ！」

瞳を睨みつけ、キッパリと宣言する。

勝手に決められるのは好きじゃない。まあ、好きな人なんて居ないだろうけど。

「あんさあ～…腹減つてない？」

えくぼをちらつかせ、瞳が問う。先ほど見た笑顔とは又違った笑みだった。

私は、へなへなと力が抜ける。

何を考えている？全く相手が読めない。

「（口）ら辺にさあ、超美味しい果物があるんだよお 行こいつ行こ

うつーね？」

「…………どこにあるの？」

他の言葉を投げつけようとするが、急いで襲つてきた空腹には耐えられない。

それに面倒な会話ばかりはしてられないと判断した私は瞳のペースにのる。

「（口）ちこつちい～

連られるがままに後を追う。瞳はこつけ的なステップを踏んで森を

探索していた。

「着いたよおん。」

頸を上へと向けると、赤く、小さな実が木に沢山生っていた。一体どんな味を楽しめるのだろうか。

「すゞー……。」

これが自然なのか。皿宅の庭に生えている木とはまるで違つ。とても優雅で、伸び伸びと育つている。

とにかく美しいのだ。声を漏らさないではいられないほど華麗を感じる。

「今日はいつも増して綺麗 つか、皿をおー。」

「美味しいの?」

毒はないのか?と心配もある反面、すゞへ食べてみたいと思つた。

「口、開けて。」

「…………?」

「いいからつ」

あつと思う間も無く、口には果物が入つていた。ゆつくりと小さい物を味わうと、今までに無かつた食感が口にいっぱいに広がる。

甘い、甘い果汁。後に残るさわやかな酸っぱさ。種は無く、皮」と味わえるらしい。

「どうすか?超美味しいしょ?」

「うん。」

素直に頷く。本当に美味しかったのだ。

「もつと食ええ~」

するすると信じられないスピードで瞳は木に登る。元祖はサルなんか?と思わせる位早い。

そして一番高い枝に座ると、ポイポイと実を投げてきた。

それを受け止め、口に放り込むと笑つた。私が笑つたのだ。

心の底から大声で笑っていた。邪魔な家来に怒るのもなく、儀式等の際に無理矢理作る微笑みとは全然違った。

冷笑でもなく、額に皺を寄せる事なく、自然と笑っていた。

「痛つ！」

『ドサツ』

「え？ 何？」

足元に瞳が落ちていた。打ちつけた腰を摩りながら、ふうと頬を膨らませていた。

「げつ 。。」

「え？ 何？ どうして落ちたの？」

私は屈みこむと、瞳の膨らんだ頬を突付く。

「んー。楓だあ。」

楓？ 耳に馴染まない響き。

「馬鹿つ！」

大きな森に轟く大きな声がした。

## 呪われしき宝石頂戴グループ

「かあえええでえええ。久しぶりに会えたのに、そんな手荒い再か

」

「うつせえつ！」

全く理解が出来ない状況。

「『呪われしき宝石頂戴グループ』隊長、楓 カエデ。楓つて呼べ。」

「同じく、隊員、海実 ウミ。そのまんま呼んでもらえれば結構。

「ええっと 私は 沙理 サリ です 」

『バツ』という音と共に現れたのは、忍者服とでもいうのだろうか？瞳と似たような服を着た二人と、所々破れながらも美しいドレスを着た、一人の華奢な少女だった。

「ここは私が住んでいた所と同じ世界か？」

「おいつ！瞳つ！てんめえはよ！一人行動はうちが許してから行えつて何度いったらわからんやつ！」

しかも通信機どつかに落としやがって 馬鹿！」

「え？俺一人行動したつけ？」

「は？お前は記憶までなくしたのかつ！低脳野郎つ！」

目の前で繰り広げられる信じがたい光景。 だつて 忍者と忍者が ？

「あのあ 。。」

私が頭を抱えて考えていると、ドレスを着た少女が話しかけてきた。  
確か名を沙理と言った。

「え？ 何？」

「あなたも そう なんですか ？」

「何が？」

「女忍者の仲間と、なつてしま..たのです.....か？」

仲間？

「違う。 女忍者なんかじゃ、ない。 私は、戻るの。」

「どこへ.....です？」

「そりやあ、もちろん元のとこ」

言いかけていた言葉が止まる。

元の場所？あの城の事か？躊躇つてている。間違えなく戸惑つている。  
だから、最後まで言えなかつた。元の城に帰るといつ一言が言えなかつた。

かつた。

本当に戻りたいのかと、問う。

分からぬ.....。

しかし、自分がさほど戻りたいと願つてはいなことは確かだ。

感情がない沢山口ボットと、表情が全く分からない仮面を被つた家  
来。

外の世界を覗くこともなければ、歩きたいといつ事も思つたことが  
なかつた。

儀式等になるとストレスや苛々は倍に積み重なつてゆく。それに比  
べ、今は.....。

「自由？ 楽しい、なの、かな。」

「えっ、あっ、の、何がです？」

「つうかさ、あなたも仲間に入れられた訳？」

「はい。」

「どんな風に？」

「……私は、小さな小さな島の、姫として教育を受けてきました。やはりドレスを着ているからには、どこかの島の姫らしい。話し始めた少女に、目を凝らす。十三才位だろうか？ 私よりも一つか二つ歳が小さそうだ。

顔も、どこかあどけない。小顔に、小さな目、鼻、口。腰の終わりの所まである、長く、かすかに茶色が混じっている細い髪。

「ところが、いつものように庭に水を撒いている時に……」「さらわれたの？」

少し押し黙ってしまった沙理がじれったく感じ、先を促す。

「はい。急に頭に思い衝撃がきて、気を失つてしまつたんです。気が付いて目を開けると、知らない人が目の前に立つっていたんですね。後に、海実さんと分かつたんですけど。」

ちらりと横目で海実を見る。瞳よりも短い髪の毛。

団体は相当大きい。しかし、脂肪なんて物は一切無いだろう。盛り上がった筋肉と、太い骨。

顔は、とても印象に強く残るものがあった。

左目の中から、口元までにも及ぶ痛々しく、とても長い傷跡。

その姿は、誰もが男と間違える程の迫力さえあった。だって、私も女忍者グループの中の一人と聞いていなければ、絶対間違えていただろう。

「……やっぱり、あの、最初はすごく、すごく恐かったんです。

両親を思つたりすると涙が止まらなかつたり。「

両親……。私に両親という存在はいなかつた。言葉の意味は知つてゐる。

どうやら、両親という存在は、私を生み出したものだといつ。もちろん会つたこともないし、興味も無い。

生まれた時からお世話なら家来達がしていたし、今の私にとつて必要はないものだらうと思つていた。

「でも…今は海実さんはとても優しいです。

リーダーの楓さんも、口は悪いかもせんが、とつても良い人です。

私がこんな偉そうな事いえませんけど。

目を線になるまで細め、照れくさそうに笑う沙理。私にはとうてい出来ない笑い方だつた。

「あんたは…」

「あつ、あの。」

「ん? 何?」

「さ・りです。」

質問を投げかけようとした私に訂正を求める沙理。

私は自然と笑みが零れる。言い方が、誰かさんにそつくりだつたらだ。

「沙理は、今、楽しい?」

少し悩んだ後、ふんわりと笑つて沙理は答えた。  
「楽しいです。」

## 質問（前書き）

又もや瞳視点でいきます

## 質問

「あの女、何だ？」

予想していた質問を問われる。

「宝魚島のお嬢様つ

真顔で、声を弾ませおどける。

「何故ここに？」

「人数足りないから増やそうって計画したの楓…だろ？」

「……あいつ、口うるさくないか？」

あまりにも的確な事を聞くよお。「う…。正直な事を言つがどうか迷う。

「今の時点ではなんも。」

中途半端な答え。でも、楓はこれ以上追求しなかった。

「ふうん。飛鳥…ね。」

もう興味がなくなつたのか、武器の点検をし始める。

ちょ、待てえ！俺だつて聞きたい事はあるさ

「あの子は？」

小柄な、飛鳥と話している少女を指差す。沙理と本人は名乗つていた。

「小さな島の姫。年は十二。」

一つ年下つて訳か。

「なぜメンバーに選んだか。それは海実に聞け。」

「ほあい。」

面倒な事、俺嫌いだから聞かないよーだつ

海実が選んだんなら俺は文句無しつ。

これ以上聞く事はないと思い、ん~っと体を伸ばす。  
知らぬ間に強張っていた筋肉が解れ、心地よい。

「ねえ~。楓。」

「あ?」

「いつ出発予定?」

「明後日の夕方頃。予定はね。」

今日と明日はここで泊まるようだ。

やつたせい! 果物あるし、ここの大木、頑丈だし。良い場所じゃん

「楓え、俺もう寝るねえ。」

「駄目。」

「えつ? いいじゃなあ~い。本気で眠い...。」

「一生寝てろ。」

「じゃあ、又明日ね。うふつ。おやすみ」

愛情たっぷりの投げキッスを送り、蹴り飛ばされる前に場所を移動する。

明後日の為にも、今日からたっぷり寝ておこう。

**質問（後書き）**

次は飛鳥視点に戻りますつ

## 作戦勝ち

沙理と話しながら寝てしまい、夜を明かしたらしい。起きると、明るい光が目に飛び込む。

「あ、飛鳥さん…ですよね。おはようございます。」

こちらも起きたばかりなのか、声が少し枯れている沙理に微笑みかけられる。

「ん。沙理。おはよお……。」

「なんかまだ眠いです。私達あのまま話しながらずっと寝ていたのに。」

「そおだね、私もまだ眠いよ。」

お互いぼやつとしている頭を押さえる。

他の人達は起きているのか?と周りを見渡すと…

「今起きたのか?水あびして、飯食え。」

低く、腹に響く声で一人の男…いや、海実が近づいてきた。

「あ、海実さん。おはようございます、」

「ん、おはよ。」

嬉しそうな顔で挨拶する沙理。

これが男と女の関係だったら、ずいぶんと微笑ましい光景だらう。

「ええっつと…瞳…何しますか…?」

頭の中でピースしている瞳が現れる。

慌てて脳内消しゴムで消したが、どこへ行つたか位は聞きたい。

「あ? 瞳? あいつはまだ寝てんぞ。二日位眠り続けるかもな。」

「いや、あいつなら五日間はねてられるだろ。」

木の陰から現れた長身の少女。きっとリーダーの楓だらう。こんがりと焼けた、長い美脚だけで相当スタイルが良い事が分かる。

木の陰から外れ、露になつた顔の方へ視線をすらす。

髪は私より少し長く、邪魔臭いのか後ろで束ねている。

鋭そうな目に整つた顔のパートが加わる。確かに、リーダっぽい顔立ちをしていふとは思う。

「ん? 何? 何かうちの顔についてる?」

じろじろと見た私を不審に思つたのか、乱暴に顔をぬぐう楓。

その姿が、小さな子供のように可愛かつたので、思わず笑ってしまう。

「なんだよ?」

「なんでもないつ。じゃ、瞳起こしに挑戦してくる」

まだ口元に笑みを浮かべたまま、瞳が寝ているらしい木に向かう。どうやって起こしそうかな…?

「○×\*#×

瞳が寝ているらしき木に近づけば近付く程、変挺で、不気味な音が聞こえる。

「\*…」

もしかして…と想像したことを頭を振つて否定する。まさか…ね?

「瞳つ!」

変な音が一番良く聞こえる場所で怒鳴る。

ついでに、瞳が寝所として使つてゐる木の根元を蹴飛ばす。

つい昨日聞いた音が田の前で響く。

もしや…と思ひ木の裏側を覗くと、頭を抱えながらもしつかり寝て  
いる瞳が落ちていた。

「

」

やはりやつきの不気味の音は、瞳の口から飛び出たらしい。  
それにしても木から落ちても寝ていられる人間って存在するんだな  
あ…。

「瞳つー！起きろつー！」

「とびつくすうぽあ…」

「何語はなしでんんだよつー！起きるよつー！」

「りすとないと、いとこいづ、みー…」

「いつとナビ、英語つてそんな発音じやないからねつ。

勝手に言葉つくれないのつー！起きろつー！」

あまりにもぐだらない会話を繰り返すのは面倒なので、思い切つて  
頬を叩く。

『ベチベチベチベチツー』

見る見るひげに瞳の頬が膨らんでいくが、気にしてられない。

しかし、何度も起きないので作戦を変える事にした。

「瞳つー！起きなかつたら、あの、美味しい赤い果物全部食べてや  
るからつ。」

「ん？」

「いいもん。全部食つてやるからねつー！」

「ん……いやあ、いい朝だね。こんな日には赤い美味しい果物がぴったりだあ」

腫れ上がった頬を押さえ、二口二口と起きる瞳。

「え？ 飛鳥も一緒に行きたい？ 仕方ないなあー一緒にいこつかあ呆れて何も言えなくなつた私の手を引いて、るんるんと歩く瞳。文句を言いかけた口を今回ばかりは閉じる。

「うわっ！」

「あの瞳が起きてるよ……。」

本当に驚いた顔をした海実と楓を尻目に、果物を食べに向かう。

「はい！ これ、やるっ」

昨日と同じ様にするすると木に登ると、沢山の果物を抱え降りてきた瞳は、両手いっぱいの果物を私に向かって差し出す。

「美味しいっ。」

「なつ」

一人でふざけ合いながら食べていると、楓の集合がかかる。

「あいよおー」

「今行く。」

お互に顔を見合させ、同時に走り出す。

笑いの余韻が残つたまま、集合がかかつた場所へと向かつた。

## 忍者服

「明日出発しようと思つ。」  
いきなり本題に入る楓。

「その前に、やつてほしい事がある。まず、海実。自服の修正と武器の点検。」

「終つた。」

「よし。次に瞳。武器の点検 やつた？」

「これからやります」

「忘れんなよつ。で、飛鳥。新しい服に着替えるのと、武器を選んでもらひ。

これは沙理も同じだな。後でうちが説明する。  
他には 飛鳥は瞳、沙理は海実に武器の使いかた等を教えてもらえ。

うちは服を渡した後、新しい通信機を作る。今日中になんとか人数分は作れると思う。  
以上！質問は？」

「……。」

「おつけ。無いって事だな。じゃあ、今言われた事を全員全てこなしてから明日出発。」

「分かつた。」

説明をしてくれるといつので、早速楓に近寄る。

ちょっと来て、と言われ他の場所に移動すると、服を渡された。

「うわつーす！」

忍者服といつのは一人一人少しでも違つりしへ、同じ服は一つ無いと言つ。

確かに全員のを見ていたが、同じだった服はなかつた。

私の服は、柔らかい生地で出来ており、少し濃い黄色や、オレンジ色をしている。

浴衣をイメージして作られているのか、腰には大きな帯びがついている。

両肩を一部出すような格好だつた。

短いスカートにはスリットは無く、中にズボンを着用するという格好だ。

すごく気に入つた私は、早速ドレスを脱ぎ着替える。

この先必要ないドレスは、楓のアイディアで木に括り付けておいた。

一方沙理の忍者服は、大人しそうな性格からして作られたのか、腕の裾とスリットの付いたスカートの丈がとても長い。

色は淡いピンクで、とても綺麗だつた。

前には釦、腰には朱色の蝶々模様の紐で結えてあるのが、衣装の綺麗さを増す。

楓はどんな服だろう?と興味深く眺めると、全体的にシンプルで、黒の紐が腰に結えてある。

その紐に掛てあるのは何だと聞くと鞭だと答えてくれた。楓の武器の中の一つらしい。

七分丈のひらひらした裾に、スリットの下に覆いでいる黒いスペツツが見え隠れする。

他の瞳と海実の服も気になるから、後でチェックしようと思いつつ、新しい靴までも履く。

この靴はサイズが違うだけで、デザインは皆、同じらしい。とても軽く、走りやすいしサイズも丁度だつた。

「楓、ありがとう。」

初めて見た楓の笑顔は、とても幼げで温かつた。

## 武器

「じゃ、次に武器…。」

忍者服を着用後、楓から武器の説明も教わる。

「うちの武器は見ての通りの鞭と、手裏剣とクナイは大体操れる。他にもやういとすればできる武器がある。タイプは…どちらかというと遠距離ってと…」。

瞳は特別製手袋を装着した上で格闘。至近距離での戦いなら瞳が一番有利かな。

他にも飛び道具は使えるぞ。

海実は裾に入っている棒…あ、もちろんただの棒じゃねえよ。で、それを使って戦う。  
威力は半端ねえ。当つたら脳天碎ける。  
んで、力勝負を怠慢としているから、飛び道具は一切使わないそうだ。

さて…飛鳥と沙理はどんな武器使つんだ?」

急に聞かれても困ると思いつつ、考える。

「あの、私、なるべく遠距離の武器を使いたいんです、けど…。」「近距離戦は怖いのだろうか、沙理が遠慮しながらも聞いた。

「んー。じゃ、沙理は『使う?』それと医療もやってくれたら助かる。

「はい、やります。弓も医療も頑張ります。」

医療を任せられたのが嬉しいのだろうか、必死に閉じている口元から、今にも笑みが零れそ�だった。

これで沙理は決定つと…。私はどうしようか…。

「飛鳥、まだ決まらない？」

じゃ、何の武器を使えれば良いか言つから、その中からでも使えた  
いの選んでくれ。」

「分かった。」

「球や剣。斧、紐、を使った攻撃、かな。他には… ん… 思い  
つかねえや。」

「鉄砲とか使えばいいじゃん。」

「それは駄目だ。」

思いつきで発した言葉に、楓が厳しい顔できつぱりと言つ。

「何で？」

「昔から忍者は使ってよい武器が規則で限られていた。」

今は随分と優しくなつて、飛び道具や特殊物を使ってでの攻撃は許  
されているが、鉄砲だけは使つてはいけない。」

「破つたら？」

「破る？そんな奴いない。忍者は皆、死に際の時でさえも、規則を  
守る。」

忍者としての誇りを持ち続けているからな。」

変なの。忍者ってそういう昔からの規則が決まつているなんて  
知らなかつた。

私にしてみれば、くだらないの一言。

誇り？… はあ？何の為の？そんな規則に縛られるなんて面倒臭い。  
大体そんな規則を破つた忍者は本当に一人もいないのだろうか？

「ま、とにかく鉄砲は駄目だ。」

分かりたくないが、表面上頷く。さて、何の武器を担当するか…  
「ねえ楓。私、じゃあ、球使うよ。」

使い方なんて分からない。でも、一番興味があつた。一体どんな使

い方をするのか。

球なんて武器にならないんではないかといつ疑問もある。

「球を選んだか。分かった。おい！瞳っ！」

「はへ？」

間抜け面をして瞳が現れる。

私はにやりと笑い、服に注目して瞳を睨むよつこにして見る。

全体的に紺色で、スカートは膝が隠れるかどつかの長さだ。スリットが入っている？と思いつきや、どうやら端が太ももにかけて破れたらしい。

青色の短パンが破れた所からはつきりと見える。

フードが付いていて、腰を巻いてるのは何重にもした、青く、細い紐だった。

硬結びをして余つた何重もの紐を馬のしつぽみみたいに後ろに垂らしている。

袖は腕の半分までない。胸のポケットには、特殊製手袋？らしきものがちらほらと見えた。

「飛鳥の武器は今日から球を使つ。瞳、お前は指導せよ。」

「りょあ～かい。」

「任せた。飛鳥がどう成長するかは瞳次第つて事だから。」

「荷が重いな。」

「うちちはこれから自分の仕事をするから。じゃ。」「あいよ。」

瞳がニッヒと口で笑つて私を見る。

「忍者服、可愛いじやん。前よりか似合つてるぜい。」

こんなにストレートに褒めてもらつた事が無い私は、返す言葉が見つからず、足元の土を蹴飛ばす。

「飛鳥。球つて意外につうか、見たまんま難しいよお。ガンバレ！」

「そんな難しい？」

「ん~、まあねん」

私は選択を間違ったか？いまさら変えたいと言つたらどんな反応するだろう？

「さて、じつちで練習しましょお~飛鳥りああやん。」

「…ちやん付けすんなよ…。」

いいから、いいから。と腕を引かれる。その力が意外に強くて、

私は驚いた。

## 修行「1」

「……」でやろつか。まず、球には色々種類があつてさあ……

一言も漏らさぬように説明を聞いた後、実際に投げる事になった。投げるのは、必ず手元に戻ってくるという優れものを瞳からもらつた。

サイズはえれるらしいので、右手に合わせて変形させる。

「投げてみてえ～。」

瞳の声に合わせて、球を投げる。

何これ？重すぎない？

最初は見た目よりも重い球に躊躇い、せいぜい五メートルも飛ばなかつた。

しかし何度もうるさい注意を受けたせいか、昼下がりにもなると十メートルは裕に飛びよつになつた。

「おお！覚え早いねえ。」

球を投げるのがこんなに大変だと思わなかつた私は、答える間も無く荒い呼吸を整える。

「そろそろ昼飯食うか。」

「……う、ん。」

「で、休憩したら又特訓だなあん

「ん、そだね。」

肩を並べて先ほど集まつた場所へ行くと、楓が何かの作業中だつた。邪魔をしないようにそつと一人でそこらの切り株にしゃがみ、どうでも良い話ばかりをしていると、沙理と海実も同じく肩を並べて來た。

「あ、あ、飛鳥、さん。」

「特訓どう?」

「あの、『』って、こんなに、疲れるんですね。まだ胸が上下に動いている事から、相当キツい特訓を受けたのだろうか。」

「キツかったの?」

「いえ。たぶん、キツいというより、私が体力ないみたいですね。」

「いや、沙理。お前なかなか『』むいてるぞ。もっと動けなくなるかと思つてた。」

地に響く低音。海実が沙理を褒める。

私は、気になつていた海実の服ももちろんチェックする。

このメンバーの中で一番動きやすい格好だった。

夜になると闇と区別がつかなくなる色。楓よりもシンプルな服だ。袖は無い。きっと邪魔だから切つたのだろう。ギザギザに切れている袖を見て推測する。

膝までない短いズボンに、恐らく何かの道具が入っている袋が二つぶら下がっている。

腰にまといているのは空手等の胴着に使つ、黒い帯だった。

「あ。飯くうか。」

たつた今私達に気づいたような顔で楓が一いつ朶ぱを向く。

一体どれ程集中していたのだろうか?

「仕度するから、そこで待つてろ。」

飯つゝに恋しきものだつたけな?

「ねえ、食料つてあるの？」

ふと心に浮かんだ疑問だった。それに答えてくれたのは、海実だった。

「森は食料の倉庫。調味料などは薬草とか混ぜて使えるし、鍋等は持ち運びしている。」

ふうーん。そうだったのか。森は…食料の倉庫…ね。

「私、楓さん、の事、手伝つてきます。」

沙理は小声で言つと、小走りで楓の元と向かつた。

私も行こうかと数分迷つていると、沙里と楓が巨大な鍋二つを抱えてもつってきた。

その鍋の持ち方から、まだ火は通していない事が分かつた。

「お。何作つたん？」

「栗ご飯です。」

「汁物」

「火、焚かしといた。」

「ありがとうございます。ここに、鍋、乗せますね。」

私がまだ一言も喋つてない内に、ご飯も汁物も火を通し出来上がり、良い匂いが辺りにたちこめる。

「良い匂い、皿どう？」

中を覗くと二十人前はあるだろう、もの凄い量だった。

一つ目の鍋は大粒の栗と、ホカホカ白米が合わさったご飯。

二つ目の鍋の汁物は、体に良さそうな具がたっぷり入つており、どちらも食欲をそそる。

海実が作つたとこつ木の器と、竹の箸を器用に使い昼飯を頂く。

「うんめえ」

「美味しい！」

「腹減つてた事、今気づいた。」

「あ、ち、ちょ！溢すなよお！俺の分だぞ。」

「うつせえな。とつとと食え。」

和氣藹々と皆で鍋を減らしてゆく。

一番最初に、「馳走様」と言つたのは、意外にも海実だった。

「え？もう終わり？まだ残つてるのに…。」

「私も、」と馳走様でした。」

海実に続き、田を一步線までにも細めて満足気に沙理が言つ。

私もふう～と唸り、箸を置く。

手を合わせ、まだ残つている一つの鍋に田を通すと、あと半分以上は残つていた。

「これ、明日の分も余分に作つたの？」

「んな訳ない。こいつら一人、大食いだから全部食い尽くすよ。」

有り得ない。こんな大量な分を一人で…。

瞳はあともう少しあけそつだけど、あのスタイルの楓まで大食いなのか…。

「今日こそ勝負だつ！楓にやあ～まけねえ。」

「ふんっ。瞳に負けたら恥だねつ。」

鍋を挟んで睨み合つ二人。……きっと毎回勝負しているんだねつ。

どうせ全部は完食できないだろつと思い、沙理と話していると

「んんん～ちょ～！最後の一 口の栗ご飯はもらつたあああ～！」

「はあ？じゃあ最後の分の汁もらつたかひ。」

「駄目え！全部最後は俺が食つのだあ～！」

「遅い！汁は完全にもらつた。」

「…は？へ？完食ですかい？」

「ふうう。いいもん 最後の『J飯はもうつたもんねえ。』J馳走さん  
つ。」

「今日も引き分けかよー。だりい。『J馳走さん。』

嘘でしょ？と鍋を再び覗くと、一つの鍋がどひびとも綺麗に輝いていた。

あ、ありえん。

「これ、洗つて来る。」

「私も行きます。」

洗い物くらいしなくては、と腰を上げる。沙理も当然の様にしてついて来た。

「洗つてくれるの？有難う。」

土の上に大の字に広がっている瞳。

なんだか妙にいじりたくなつた私は、足元に落ちている石をなるべく当らないよに投げた。

しかし今日の特訓を受けたせいか、投げた石は瞳の顔めがけてカーブを描く。

「危ないつ。」

自分で投げといて目を瞑る。

さすがにやばかったと肩を縮めて目をそつと開くと、瞳がいなかつた。

さつき寝ていた場所には。

「危ないつて、飛鳥が投げたんじゃないかな…。」

眠そうな声が真後ろから聞こえ、驚きつつも後ろを向くと、眼を擦つている瞳が立っていた。

全く、気付かなかつた。石を避けた事も、後ろにいた事も…。この能天気さのどこにそんな能力があるのだろうか。一体どれ程の修行をつみ、努力をしてきたのだろうか。

私には、まだ、全く分からぬ事だらけ。でも、たつた今、近づきたいと思つた。今までにない感覚が湧き上がりつてくる。近づきたい。少しでも追いつきたい。自分の武器を使いこなしたい。

自分の欲望の塊。

それが身体に行渡り、感情や行動となつて表れる。

「瞳つ、私、洗物したら修行するからつ。」

「分かつた。んじや、しゃあーないから起きておくよー。」

「沙理、さつきの場所でいいな?」

「はい。」

沙理も修行を早くやりたいのか、自然とお互に駆け足になつていた。

洗い物を丁寧ながら、素早く終えると、私は瞳の元へと走った。沙理も、それでは。と言つと、海実の元へと駆けて行つた。

「おお、来たな 修行はじめよつかあ。」

「うん。」

案の定、木の上にいた瞳。すこく高くて、丈夫な木だ。

これならあと十人は余裕でいけるな。

「あや―――――っ！」

耳が痛くなる程の悲鳴。……きっと、沙理だ。

## 戦い「1」

「あ、やべつ、敵か?」

咄嗟の事に驚いて固まつた私に対し、瞳は音も無く木から飛び降りると私の手を引いた。

「行くよつ」

「え? あ、うん。」

完璧に戸惑つてゐる私。手を引かれるがままに走る。

「あ、ちょ、ストップ。」

息が切れそうになつた頃、急に止まれと命じられる。

言われるがままに止まるど、そこは先程洗い物をした、すぐ傍の場所だつた。

「敵は七人。楓はもう戦つてるな。お、あと五人つてどこか?」

目を凝らすと、楓が鞭で一人の男をふつ飛ばしているところだつた。飛び道具も同時にこなしてゐるのか、派手な金属音が耳に障る。

「ふうーん。楽勝つてどこか? 飛鳥、いける?」

「え? は? 敵と戦えつて事?」

「大丈夫。俺が援助するし。」

「…分かつた。」

不思議と高鳴つていた心臓は、冷静になつてゐた。

それどころか早く武器を試せるという感覚から、恐さは全く無かつた。…私、狂人?

「いけつ。」

背中を思いがけない力で押される。

もうやけくそ状態で敵に向かつていく。

今日調整してもらつたばかりの球を手に握ると、不覚にも笑みが浮かんでくる。

「ちっ、まだいたか。」

敵は男。すでに一人は意識がないようだ。  
一人の若い男が私に気づき、舌打ちをする。

「お前、そんなボールで俺に勝てると思つ?」

「あんたには勿体無いかもねっ」

挑発されたのが悔しくもあり、力任せに球を投げる。  
球は狙い通りに飛んでいき、相手の右耳に命中する。  
まさか本当に攻撃されるとは思つてなかつたらしく、完全に戸惑つ  
ている。

「いてっ。くそっ！舐めんなっ。」

「負け犬は黙つとけ。」

今ので完璧にキレたのか、本気で向かつてきた男。  
田で確認できない素早い動きで飛び道具を投げられ、固まつてしま  
う。

やばい。

「うぐっ。」

刺されたらどれほど痛いかを考えていた私の田は、田の前で倒れて  
いく男を捉えた。

誰が倒したか　。そんなのは分かりきつてい  
る。

「瞳、ナイス、援助。」

「お、今のでやる氣出たぜ。」

「瞳つーちょーーこつち頼む。」

声がした方を見ると、残っている四人の全てが沙理を囮んでいる。海実と楓は、攻撃したら沙理を容赦なく殺すといわれ、舌打ちと睨みをしたまま、武器を地面に置く。

「おい、そこのガキ。お前も武器を捨てろ。」

「は？俺？」

「他に誰がいるのか。おお～っと、その隣にいる嬢ちゃんも武器、置いてもらおうか。」

なんで俺はガキで、飛鳥はお嬢様なんだよ…。瞳のつぶやき。頬を膨らまして、飛び道具を地面に投げつけている。

私も、捨てなくちゃ。じゃなければ、沙理が…。

「早くつ、俺は気が短いんだぜ？」この女、殺すぞ？」

「この卑怯者。」

楓のアルト声。そんなの、卑怯だ。最低な事をすんじゃねえよ…。声にならない憎しみまでもがこちりに伝わってくる。

「本当だし。全く、落ちぶれたおっさん達だね。」

唇を尖らせた瞳の文句。

その後、小さな声でついでに俺はガキじゃないと付け加えようとするのが分かる。

しかし、それは言葉として口から出る「とはなかつた。  
「無駄な話はやめろ。とつあえず、そつちの一人」

私と瞳を指差す。

「こちらに来い。抵抗したらいの女、殺す。」

ほんと、うつさい野郎だ…。瞳のわざとらしい溜息と共にでる愚痴。しかし、何故か余裕な、感情が浮かんでいない笑みを浮かべながら、瞳が前方を歩く。

私はその後をついていくしかない。

……どうする？

武器の球は地面。とりにいつて攻撃するには距離がありすぎるので、良い方法が思い浮かばず、唇をかみ締める。

何もできない。

無力だ。

嫌になるほど無力だ。

こんな卑怯な手をとられ、そいつらに逆らえもしない…。

己の弱さを突きつけられた気がする。

こんなにも抵抗できないとは、思つてもみなかつた。

楓と海実と、四人組の男のいる場所までむかうと、そこで立つていろと命じられる。

そのまま無言の時間がすぎ、いつの間にか倒れたはずの男が一人、仲間に支えられてきた。

その内の一人は先程私と罵声を浴びせ合い、瞳の一発殴りで地面に叩きつけられた男だつた。

「生意気な奴等め。後でやばいことになるぜ？」  
もう一人、氣を失つていない方の男が顔を歪ませながらこちらを睨む。

「いや、お前の顔の方がやばいぜ？」

げらげらと瞳が笑う。同感だつたので内心頷く。  
馬鹿にされたと感じた男は、怒りを露にし、なぜか私を殴ろうと右手で大きく振り被る。

私は無意識に地面に転がると、大きなサイズの石を顔面めがけて投げつける。  
「げほつ」

見事命中！

「ナイスつ！」

男が再び地面に倒れるのと、楓が素早く武器を拾い上げたのは全く同時だった。

それがまるで合図かのように海実と瞳が音も無く動く。

数分後。田の前に広がっていたのは男の体と血痕。そして、呼吸を整えた私達五人だった。

## 敵、仲間

「おま、飛鳥、見た目より全然使えるつーおもういわあー  
良い運動になつた。」

「あの、怪我まだ治つてないんですけど…。」

「武器拾つてくる。」

「ちょっと、ここつ等まとめんの手伝えよ。」

戦いが終つた後、地面に転がつてゐる男達をロープで巻く。  
何故かそんな面倒な事をするのか聞くと、宝石についての情報等を  
聞きだすそうだ。

「え？ 捷問ですか…？」

「そこまで手荒い事はしねえよ。ま、相手次第だけじよつ。」

「まだ生きてるし…。」

「こいつ、リーダーっぽいね。」

「あ、飛鳥の初敵じやない」

まだ息のある者、合計四人を全て一本の縄で締め上げ、無理にでも  
起こす。

私は血で濡れた服を見るのが躊躇われ、少し目を逸らす。

「ん…う。」

「ううう…。」

全員が目を覚ますと、早速楓が問う。

「おい、全て正直に答える。」

「……。」

「お前等は呪われしき宝石を狙つてゐるものか。」

呪われた宝石。

今、探し求めている物 らしい。

詳細は聞いていない。そのうち聞くつもりだが、実は今まで忘れて  
いた。

修行が落ち着いたらじつへり聞こいつ。やう、思えた。

「おう。」

少しの沈黙の後、そっぽを向きつつ答えたのは私が負け犬とけなしたあの男だった。

やはり、リーダーなんだろう。答え方にも威厳があった。

「んで、手に入れた情報、全て吐いてもらおうか。」

「情報？自分で探すんだな。」

「ああ？自分達の状況分かつてんのか？」

迫力がある海実の声。本気で怖い。

相手はあまり怯んでいないが、もし私があの声で、あの田で凄まれたら

いや、考えちゃいけない事だ、きっと。

私は海実が敵じやなくて良かつたと心から感じた瞬間だった。

「ああ、嫌になるくらい。小娘に仲間も一緒に縛れられて、危ない状況だろ？」

「あらん リーダー君よ、人の事小娘とか言つてるけど、実際俺等と大体歳変わんねえだろ~。」

うぐつと息を呑む音。つまり間違つてはいのだろう。私よりも年上だが、海実と同一年だろうと推測。

「おい、リーダーこう言つてるけどいいのか？」

お前等私達に殺されるかもよ？てか實際仲間二人いなし。

しばし無言の時が過ぎる。

「俺、全て話すから離してくださいつー。」「俺もこんな所で死にたくねえよ……。」

氣弱そうに俯き、喉から搾り出したような声で訴える一人。

「ふうん…。じゃ、海実。こいつ等、他の場所で、じっくり話聞いてやつて。」

「おう。」

さつき沙理を人質にし、散々私達を馬鹿にした男が、震えながら海実に連行されていた。

あれが素なんだろうな。

あーーあ。私、あんな奴に苦戦したのか。

そして、残った二人。脅しに怯まずに、立っている男。

その内の一人、リーダーと呼ばれる男は、鋭い目と、軽く開いた唇からは尖った歯。

鼻筋の通った顔を持ち合わせる。

首筋まである髪は、闇を溶かして染めあげたかのような漆黒。荒い息と共に、うなじから血色の良い肌が見え隠れする。

なんか悔しいが、相当な美形をしている。

もう一人は短く刈り込んだ茶髪の男。

髪の毛に合わせず、顔はあどけなく可愛い。

リーダーに比べると、筋肉の付き方や身長差が彼を貧弱に見せるが、私に比べると相当な力の差があるだろう。

「残っちゃったね、お一人さん」

士の上なのにも構わず胡坐を搔き、ニヤニヤと笑っている瞳。

「俺、情報漏らすわけにはいかねえ。」

「俺も。リーダーに従います。」

「素晴らしい友情だね。裏切り者の御二人とは違つて。」

「うつせえよ。てか、お前！」

今まで一言も話してなかつた私を指差す負け犬いや、リーダー。

「は？負け犬に話す事はねえよ。」

「俺、どうしたら負け犬卒業できる?」

沈黙。

「へ?」

「は?」

あまりにも切なげな表情で、明らかに拗ねている表所を見せる男。そうゆう仕草が全くもって似合つて無いが、妙に艶色がある。

「負け犬って悔しいのかよ…。」

沈黙を破った瞳がぷつと吹き出し、馬鹿にするような眼で男を見る。

「あの、怪我、大丈夫ですか?」

「…はい?えっと、俺?大丈夫だよ。別に。」

自分のリーダーの人格の代わりよう、驚きすぎて声も出ない様子だった刈り上げ少年に同情を感じたのか、敵なのにも関わらず心配している沙理。

「俺、真面目に負け犬って嫌だな…。」

「おい!さつきまでの鋭い目はどうにやつた?」

「お前つ!」

「飛鳥。」

「え?飛鳥つて言つの?」

「…。」

無言で頷く。名前を教える必要は無いと思つたが、不思議と名乗つていた。

「飛鳥あ、俺さ…。」

「こきなり呼び捨てかよ、」

「飛鳥！俺、お前に魅かれた！」

……先ほどより冷たく、長い沈黙。重い空気が背中に伝わる。

「何言つてんの？」

「…………。」

「まじかよ……。」

……何？この展開。有り得ない。信じられない。

悪夢？魔術？黒魔法？怨念？呪い？自業自得？

私、何かしました？

「今、決めた。俺、仲間になる。んで、負け犬卒業する。」

「無理。」

やつと声がでた。一生声がでないかと思ったから本気でほつとする。

「お願い！飛鳥っ！」

「呼び捨てにすんな。」

「頼むつ！」

「嫌。大体、私が決める事じゃないし。」

楓を横目で縋る。リーダーの楓。主権は彼女にある。

早く断つてほしい。早く目の前からこの男達が消えて欲しい……。

「仲間には出来ない。」

落ち着いたアルト声。いつもより遙かに安心感を与える。

「でも、情報を教えてくれるならば、しばらくは同行を許可する。」

……落ち着いたアルト声。いつもより遙かに不安を感じた。



## 修行【2】

未だ信じられない私に追い討ちをかけるかのよつて話は進んでいく。  
「ええ、そうですよ。良い方向とは別の方へ。

「俺だつて全部の情報を教える訳にはいかねえよ。

大体、情報つていつても高が知れてんぞ。」

「そこはお互い様だな。でも出来る限り情報を引き出す。」

「俺も。このまま殺されるよりかは、喜んで同意します。」

坊主男も沙理を熱っぽく見てから小声で言い切る。

「マジ?」

「おう。」

いまさら私なんかに拒否権はなかつた。

私以外に反対する者が居なかつたからだ。

「誓え。裏切らないと。」

「当たり前。」

リーダー同士で何かを呴き合つ。邪魔はしたくないので、数歩下がる。

こんな事になるなんて、全く予想外だつた。

生きてるつてこうゆう事なんだろうか?

勝手な予想してしたり、高を括つて居ると、あつさり裏切られる。  
あつけない程に自分の惨めさを知る。

「飛鳥。」

「ん、何?」

「お前、なんか変な奴に好かれたみたいだぜ。」

「認めたくないけどね。」

「つぶ。ま、これからさ

「なにがだしつ！」

リーダー同士の相談が終つたらしく、縛られていた男二人組の縄を外す。

「楓、こっち、情報聞くの終つた。」

「ご苦労、そいつら、逃がしていいけど、アレ誓わせとけ。」

「もう誓わした。んじゃ、離すよ。」

海実と話していた一人の男は、海実に頭を下げ、一瞬で逃げ去つた。

「あいつ等、本当に仲間か？」

「……一応そのつもりだつた。」

表面では冷静を保つてゐるリーダー。が、仲間に裏切られたショックは小さくないだろ？

仲間と信じ、共に行動をしあい……それがあつさりと裏切られた事実は、深く心に傷を作るだろ？

「飛鳥ああ、修行すっどお～。」

「分かつた。今行く。」

「俺も行く。」

「え？ は？」

「いいから、いいから。」

先程とは全く違う顔つきで、こちらの背中を押す男。

「あんた、何？」

「俺？ 名前かい、何だっけ？ ん～……、あ、思い出したわ。」

名前を忘れていた人を、初めて見た。しかも、こんな近距離でお日には繋れるとはねつ。

「俺の名前は、夜人。夜に人と書いて、ナイト。」

「名前だけはカッコイイんだ。」

「うつせえよ。」

「本当の事だろ。」

唐突に大声が木々に響く。

「早く～、俺寝ちゃうよ～しかも、飛鳥、楓の毒舌つつひきてるつて！」

「ああ？なんかうちの事いつた？」

「いや、あの、はい！楓様のことは何も言つておりませぬヂス！早く～修行しましょ～、飛鳥ちゃん、夜人君。どうやらさつきの話、全て聞いていたよつだ。

あんなに遠くにいるのに。

私の眼球では、見えるか見えないかどうかの距離にいるのに…。

「行くぞ、飛鳥。」

返事をする気にもなれず、早足で瞳の元へと急ぐ。

辿り着くと、瞳は自分の特殊手袋で一人修行を行っていた。

「瞳？」

「お、そおりい。んじや…やるか。」

隣をそつと見ると、何も言わず傍にある木と一対一になり、黙々と修行を始める夜人。

なんだよ　私の後に付いてきた意味ないじゃん…。

「飛鳥、これ、まず復習ねつ！」

さつきの修行よりもハードな内容をこなし、日も落ちてきた頃、だった。

「休憩～、俺、自分の修行するから、そこいら辺で休んでて頂戴～  
荒い息を整えつつ、切り株に腰掛ける。

確かに修行はキツかつた。でも、心底疲れたという感じはしない。  
隣でも、ゼイゼイと荒い息がしたので見てみると、夜人だった。

「はあ、腹減った。」

独り言かと無視していると、急に腕を引き寄せられる。

「飛鳥！」

近い！かなり近距離。

夜人の細く、漆黒な髪が額に当つてくすぐつたい。  
この状況で、私は不覚ながら美形は近くでも見ても美形ということ  
を学んだ。

「何？」

早く離れるよという気持ちを精一杯込める。

いつもよりマイナス五度くらい冷ややかな声が出た。

「あのさ、」

「何つてば。」

ぐんと距離が又近くなる。

尖った歯が一本、異様なまでに輝く。

この体勢に限界を感じ動こうとするが、夜人の重みでちつとも体は  
動かない。

いや、重みではなくて、ほぼ叶わない力で抑えられていた。

「俺の名前？えっとね、リュウジのリュウが、流れるつて字。んで、リュウジの司は、司会の司つて字だよ。君は？」

「あ、えっと、私の名前のサリのサは…」

「これ以上居ても存在すら氣付いてもらえないだろ？。後で絶対邪魔をしてやろうと誓い、大人しく引き下がると、後ろには修行を終えたのか海実が立っていた。

「お疲れ。」

「そちらこそ。」

短く、そつけないが、両者とも本当に思つてゐる事をそのまま伝えた、という感じだつた。

「沙理、弓向いているの？」

「ん~…。まあ、良い線はいつてる。

でも、今は人に向けて打つといつう心の準備が出来ないらしい。飛鳥見たいに球だと、急所に当つても死亡の確率は低いが、弓の場合、相当死亡率は高いからな。」

「心の準備…。」

「これから頑張るみたいだけど。医療もね。」

「ふうーん…。」

綺麗事ではないが、私も頑張らなくてはならない。心の準備…。決意…。まだまだ、足りない事ばかり。かなりの数の物が、欠けている。

「終つたー！」

少し離れた所で、楓らしき声。重い思考モードにならうとした頭を中断する。

「ご苦労。」

「何が出来たの？」

「通信機。さすがに五人分は疲れた。」

こちらに近付いて来た楓が差し出したもの。

想像していたのとは全く違つており、見た目も使いやすそうで良かつた。

「最初から全て作つたの？」

「多少は前回の通信機の材料を使つた。」

「うわ、すげえ。俺の分は？」

楓の後から来た夜人の言葉は、楓によつて黙殺された。

「すごい！ですね、機会音痴の私、絶対出来ません。」

「俺の分とかあるのかな？」

いつのまにやら集まつた、沙理と流司もぢうん流司の言葉も楓によつて黙殺された。

「これ、海実の分。で、これ飛鳥。こつちは沙理。あれ？一匹いねえよ。」

「首輪つけてないの？」

「やば。付け忘れた……。」

「……」

「……」

とても人間を探していふとは思えない会話をしていると、頭上から声が降つてきた。

「これ、瞳の。置いとくよ。」

「さんきゅつ」

音もなく飛び降りると、嬉しそうに通信機を抱える瞳。

胸ポケットに入れようとするのを、海実と楓が素早く、そして鋭く睨みつける。

「あ、そつか。今度はちゃんと他の場所入れなくちゃ……。」

「……馬鹿……。はあ……。まあこんな馬鹿ほつといて、」

「俺、なんか寂しい人間じやん……。」

「昨日も言つたとおり、明日出発。それまでに全てを整えておく」

「了解。」

「今日の修行は終了。あとは適当にやれ。以上。」

「了解。」

「そんじゃ、夜御飯でも作るか。海実、手伝つて。」

「おひ。」

流司と仲良さげな沙理に氣を使ったのか、今回は海実を誘つて奥へと消えていく楓と海実。することが無いので瞳で遊ぼうと思つた時だった。

「飛鳥。」

「呼び捨てにするなつて。」

性格を除けば、容姿も声も完璧な男。

最初にあつた棘は今、一日もたたない間に感じられなくなつた。

「飛鳥。」

特殊手袋を空中に投げて遊んでいる少女。

何人もの人を殺してきたようには見えない姿だ。

「なに?」

少女の方に向かつて返事をする。

「俺さー、ちょっと、走つてくるわー。」

え?

「修行したじやん?」

「あれじゃ何かまだ足りねえんだよー、いつきます!」  
さすがに一緒に行くというまでの体力は残つていなかつた。  
いくら心底疲れていないとはいえ、修行を終えたばかりの体ではキツいと判断した。

「沙理。」

夜人と二人は考えたくも無かつたから、沙理に助けを求めるようこの呼ぶ。

流司と良い感じだらうと関係ない。今は自分優先っ！」

「はい、何ですか？もし良かつたら、飛鳥さんも御一緒に話しませんか？」

「口うり田を細めて笑う沙理。

少し悔しそうに唇をかむ流司は、彼女の視界に映つていない。

「うん、それがいい！」

肩を落とす流司に残念だったね！と同情サインを送る。

本当ですよー、と訴えかける流司は私の視界に映つてない。早歩きで沙理の隣に座り込み、息をつく。

「飛鳥あ～」

「呼び捨て禁止。しかもなんであんたまで話に加わる訳？シッシ。いつのまにか流司の隣であり、私の正面でもある位置に座っている夜人。

「俺はペットかよー。ってか、おい、りゅ～。」

小声で不機嫌ながら、流司です。と訂正する彼は、沙理の笑顔によつて機嫌が直る。

「えつと、リーダーさんは、何という名前なのですか？」

「夜に人と書いて、ナイト。」

「かつこよい名前ですね。」

「名前だけね。」

「酷いな、飛鳥は。」

「だから、なんで呼び捨てなの…。」

「私はサリと申します。沙翁の沙に、ことわりの理です。」

「やべ、全く漢字分かんねえ」

同感でもそれを言わないのは私のプライド。

「リーダー、もっと簡単に言いますと、沙理さんの沙は、さんずいに少ないと書いて、沙理さんの理は、理科の理ですよ。」

「おお、りゅ～。分かりやすいな。それ。」

「ありがとうございます。」

その様子を呆れた表情で見る私。

その隣の少女はとても優しい眼差しで一人を見る。

私はこの少女と同じ人間かと問われると、はっきり頷く自信は無かつた。

「えっと、さつき流司さんには聞いたんですが、夜人は何故忍者になつたのですか？」

一体どんな話をするのか疑問を持っていた私は、心底驚いた。いきなりこんな質問を、あつけからんとして言う沙理は大物だと感心するしかなかつた。

「え？ は？ 僕？」

「はい。」

さつきまでのテンションとは違つた空気が周りに漂つ。さつと夜人の伏せられた目に、睫毛の影ができる。

「流司は話したのか？」

「はい。沙理さんには言えると思つたし、俺、別に言つても構わない事情ですから。」

「私も聞きたい。」

構わないなら良いだろ？と判断して、好奇心を言葉に表す。

一体、この少年はどんな経歴で忍者になつたのだろうか。

過去

「え？ とですね。一言でもおひめるとワーダーに惹かれたんです。」

無表情な夜人。

「詳しくいいますとね、普通よりも少しいや、何倍もの貧乏な家庭に生まれ、母親しか生存していなかつた環境の中に俺はいたんです。

んで、十歳の時、急に母親が亡くなってしまった。居場所を失った俺は、どこか知らない森の中にいつの間にかいたんです。

そこで出会ったのか——タ——なんです  
まず正直、見た目に惹かれ、襲われそうになつた俺を助けてくれた  
勇気に惹かれ……。

一生ついていこうって思つたんですね。  
同行を許可してもらうのはすごく大変だつたけど…。  
つなんとかここまで來たつて感じです。

た。この話は、どう聞こたつて軽々しく言える事情ではないだらうと思つた。

軽々しく聞けるような事情でもない。

十歳といつすいじく若い年で居場所をなくし、森で彷徨つた時はどん

それに、襲われたって……え？

「ちょっと、襲われたって…、誰に？」

「なんか俺、その年では、ショッちゅう女子に間違えられて。確かに髪の毛は伸ばしたままでしたから。

ん~、腰よりも長かつたと思います。顔はどうだつたか知りませんけどね。」

きっと可愛いかつたよ、うん。

「…それで？」

「それでですね、なんか飢えてたっぽい男が一人いて。目は虚ろで、今でもはつきりと思い出せますね。

そいつらに、急に、後ろから抱きつかれて…。」

一気に話したのが疲れたのか、呼吸を一度整える流司。その間に夜人がぼそと補足をする。

「真面目に、やばい奴等だつた。

このままじゃあのチビ玩具扱いされると思つたんだよ。てか、本当に流司、可愛いかつたんだよなあ。俺も最初女かと思つたぜ？

最初は無視しようかと思つたけど、そこまで冷酷人間じゃねえから助けてやつた。」

「そう、だつたんだ。」

過去の事だから、と切り捨てているのだろうか。流司は最後まで表所を崩さなかった。

聞いているこっちが涙しそうな事情だった。

その時、私は何をしていただろう？

いつものように規則正しい生活を送っていた。

あまりにも次元が違うすぎる。

同じ地球上、同じ国内で生きていて、何故こんなにも違うのか。何故、こんなにも与えられた試練が違うすぎるのか。

小さい頃、神等ないと教わった。

表面上分かりましたと頷いていたが、実はいると思ってた。冷酷な存在。人の命なんてゲームの駒以下としか思つておらず、気分屋で。

何でも執着を持たない。

やろうと思えば何人もの人間を有頂天にも出来るし、更に地獄に落とす事ができる。

恐ろしく、この世の中で一番厄介な存在。

それが神だと幼い頃から思つていた。今もその考えを持ち続ける。

「ちょ、沙理さん、また、「

慌てたような流司の声。

見ると、沙理の目が妙に光つている。と思ひきや透明な雫が、少し高潮している沙理の頬を伝う。

沈みかけた陽に反射して、このうえなく綺麗に輝く。

こんなに美しい涙を私は今まで見た事がなかつた。

こんなに美しい雫を流している人を、私は今まで見た事なかつた。

「え。あ、すいません」

「そんなに感動します？」

いや、感動とは違うだろと声に出して突つ込めるほど、私は大物ではない。

「一回も、こんな、見苦しい姿。すいません、」

本当に申し訳なさそうに、肩を縮めて誤る沙理。

「俺の為なんかに泣いても良い事ないよ？」

「いえ、あの、本当、」

二人は自覚がないだらうけど、この甘い空氣。

やつぱり入つてこない方が良かつたのかもしれない。

「行くか、飛鳥。」

「うん。」

呼び捨てにされているのにも気付かず、そつとその場を離れる私と夜人。

あとがどうなるかなんて最後まで見たいとも思わない。

何を見せ付けられるか分かつたものじゃないもんね。

しかも 二人とも自覚無しながら更に見てられない。

「お、ただいまっ」

食事が運ばれる場所へと足を運ぶと、先着がいた。タオルで滴る汗を拭っている。

「おかげり。」

「どうも。」

「どうもって、変じやね？あ、てか俺瞳ね。よろしく。」

「俺、夜人つす。」

「飛鳥はまだ渡さんぜよ～。まだあげないぞよ～。」

「げつ、ばれた？」

「ふつふつふつ、お前みたいな美貌にはもつたいない！」

「それは、おつ」

付いていけない会話に目粉るしさを感じ、妨害する。

このまま意味の分からぬことを目の前で話されても困る。

「ちょっと、まつた。ストップ。大体何が渡すだよ。しかも何? もつたいないの使い方違うしつ。」

「仕方ない、しょうがない、はい、御一緒に」

「仕方ない、しょ」

「うつさい!」

再び異世界に行こうとする一人を引き止める。

瞳ワールドに巻き込まれそうになつた夜人は、はつと口元を押される。

「何にが、仕方ない、しょうがない、だよ。馬鹿……。」

「本当は一緒にやりたかったの? なんだ、先に言つてくれればよ」

軽く爪先で相手を小突く。

避けるのも造作ないだろ? に、瞳はわざとらしく仰け反つた。

聞いてみても良いだろうか?

「ねえ瞳 ?」

「あいよ? なんですかいい?」

口調程ふざけていない顔。むしろ真剣にこちらを伺つてゐる。

「瞳はさ、どうして忍者に」「飯。出来た。」

単語を組み合わせた言葉。とても低音で、なぜか落ち着く海実の声。一瞬気になつた事を、声に出さず押し込む。

だつて。

だつて。

「瞳はせ、じいじ忍者になつたの？」

なんて。

まだ聞くべきじゃない。

瞳は、さうと言いたい事が分かつたはず。

だから。

だから。

あんなにも顔を曇らせたんだ。

だから。

あんな顔をしたんだ。

「飛鳥あー？ 飯いくぜっつ。」

満面な笑みを浮かべた瞳。

一瞬翳りを帯びた目はそこにはなくて。

「うん。あれ？ 楓は？」

「もう来る。」

「お、楓。いつにもまして血色がいいやん！」

「当然っ。なんてね。」

アルト声が軽く返ってくる。いつもより柔らかな表情を浮かべた楓。

「あの一人は？ まだイチャつき中？」

「あ、『ご飯。ありがと』『ごめんなさい』。」

「美味しそう！』

ナイスタイミングで現れた一人。皆の冷やかしの皿に全く気づいていない。

「今日はいつもより多めだから。」

「あ、ありがとうございます。」

「俺達の分？」

「いや、全部俺が食うからっ。」

「瞳、まだ食いつもり？」

和気藹々とした中、自然と会話が弾む。

今までになかった事。

命令でも、怒鳴っている訳でもなく、笑顔で朗らかに話している。

瞳や楓、海実や沙理。

そして夜人や流司と話すと、こんなにも自分が変わるものかと自覚せずにはいられなかった。

「んじゃ、揃つたし食つか。」

「いつただきて！」

鍋を取り囲み、昼間よりも多い量が入った御飯を食べる。

何の料理かは知らないが、ともかく美味しいといつ事だけは分かった。

「これ、何の材料使つてるんですか？」

「ああ、山菜。沢山取れるし。」

「こちらの汁物は？」

「実はほとんど同じ材料。味付けを変えて、見た目も少し違くしただけ。」

「そう、なんですか。同じ材料なのに違つた味になるんですね。」

「なあ～、楓～、今日ひた、俺勝つよ～。」

「また勝負？いいけど。いつも勝つよ～。」

「いや、今回は夜人様も参加するぜつ。」

「いやいやいや、駄目だから。俺の食べる量減るじゃないかつ。」

「そうつすよ、リーダー。ゆづくりこきましょうつよ。」

「りゅ～、もやりたいか？」

「そ、そんな、まさか。飛鳥さん、何かこいつやってくださいよ～。」

「うつせーー今食べてるの。」

「飛鳥もやるか？」

「やんない！」

眉をひそめながらも内心すげく楽しんでいた。

こんな時間が来ると思わなくて。

一生お嬢として城に閉じ込められる日々が続くと思ってたから。伸び伸びと過ごす事なんて、一生無ことあきらめていたから。

むしろ、望む事を許されなかつた。

「「馳走様でした。」

「私も、もういいや。」

先に食べ終わつたのは眞と同じく、沙理と海実だつた。  
その数秒後に私も「馳走様と亥く。

「俺も、もういや、「ごちそうさんでしたっ」

流司も腹をかかえて手を合わせた。

「ああ～～～！もう、俺無理だつ～す～い食欲だな、一人ともつ。

俺、初めて自分より食う奴見た。」

限界だあ～！と言わんばかりに大の字に寝る夜人。

残つた二人はお互いを睨むようにして残つた食料に食らいつく。

「ふがあがつ」

「ちゃんと飲み込んでから話せよつ」

……もちろん両者とも完食の為、引き分けだつた。

「くそ、次こそはつ！」

「瞳、明日からは決まつた量だけだからな。」

「まじかよ～、ちえつ、しゃあ～ないな～。」

「んじゃ、今日のティナーは終了。後は自由。」

「飛鳥～！俺と散歩しよう。」

さつき走つたらしいがまだ森を探索したいらしい瞳。  
特に断る理由も無いので、分かつたと頷く。

「沙理さん、さつきすつ～い淡い感じの花見つけたんすよ。」

「え？あ、見たい、です！でも、御飯の片付けが終つてから行きま  
すね。」

「沙理、行つて來い。片づけは私と夜人でやるから。」

「え？ ちょっと、俺つすか？ うげ、飛鳥の後ついていいつと思つたのに。」

「ちょっと、飛鳥は俺のだからあげないよ。」

「ちょっとまで、瞳。なぜ私がつっこもうとした所で、変な事言つてんだよ。」

てか、夜人。ついてくるな。

「つけ。」

「いいから。早く手伝え。」

「…了解しやしたあ。」

海実の後につづいて鍋を運んで行く夜人。

楓は寝転がつて空を見上げていた。

「楓、何してるの？」

星。うち、星好きだから。小さい頃から星ばっか見てた。

星を見上げている楓は、なんともいえぬ表情だった。  
無表情とは違う、言葉で表せない表情だった。

「あ～す～か、行こ～うぜっ。」

「あ。うん。」

## トントントン

軽い足音。

遙か手前を歩く瞳の短髪が左右に揺れる。

辺りは真っ暗で。何故か夜人の髪の毛を連想させる。

「飛鳥、木に登ろっ。」

「こんなに暗いのに？」

「違う。暗いから登るんだよ～。」

スルスルと猿以上のお手前を見た後、ほぼ引っ張り上げられる状態で枝までたどり着く。

「うひょ。気持ちい風つ」

高い所があまり平氣でない私は、暗闇に感謝した。  
視力の良くない田では、下が見えないからだ。

「涼しいー。」

瞳みたに両手を離す事はできなかつたけど、太い枝の上でそつと  
包み込むような風に飲まれた。

『そつと幹に口寄せ  
魅惑の樂園辿り着く  
婉曲な告白と共に  
淡い己の真偽知る』

それが歌という事を認識するのに時間が掛かつた。

言葉を繋ぎ合わせ、ただリズムに合わせなんてものではなかつた。  
流れる風に身をまかせ、記憶に残せない旋律。  
すうつと溶けていく歌。どこか寂しげで。

「…飛鳥？」

「今、歌？」

「当たり前じゃん。俺が歌つたんじゃないけどねつ。」「  
甘く、引き込まれる声だった。

この声をもう一度聞く為ならば、体の一部を捧げても良いなどと狂  
気じみたことを思つてしまつた。

「誰？」

「さつきの歌声の持ち主？」「うん。誰？」

「うん。誰？」

「あたし。」

危うく木から落ちそうになつた所を瞳が支える。

いつの間にか私のすぐ後ろに一人の眼鏡を掛けた少女がいたからだ。

「飛鳥ちゃんだよね？ あたしは、魅夜。瞳と元同じグループの中で唯一今も仲間だよ。」

## 夕御飯（後書き）

女忍者17話目になりましたっ

ここまで見てくださつて本当にありがとうございますっ。

詩の方も、読者様がいてくれて感謝でいっぱいです……。

まだまだ修行が足りませんが、これからもよろしくお願いいいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4026d/>

---

女忍者～呪われしき宝石頂戴グループ～

2010年12月22日14時43分発行